

保 育 随 想

幼稚園から

家庭へ

大 下 祥 子

一〇年余の幼稚園での生活から、家庭に入り一年半、幼児教育とはすっかり縁が切れてしまったはずの私が、自分の息子を育てることにより、再びその世界に、首をつっこむことになりそうである。

幼稚園を辞した当時は自らの力の無さにより、幼児教育について疑問ばかりが残ってしまった。

○幼児教育そのもののこと

○教師自身のこと

○作られた不自然な集団

への疑問

○集団教育の開始時期

○費用の莫大さ 等々

今思い出しただけでも、こんな具合である。私自身の拙い経験から感じたことではあるが、母親となってみると、幼児教育についての思いを變更せざるを得なくなってきた。私的な考えであるし、これからも息子の成長に従って立場が移り変わると共に変わるであろう。今は、息子との一年間の付き合いを通して幼児教育をみてみたい。

人間になっていくということ

息子は満一歳になった。まだ付き合って一年にしかならないが早いものでだんだん人間らしくなってきた。誕生時から頑固な子で、新生児室の中で誰よりも大きな声を常にはりあげていた。もちろんこれによって、性格、人間性を決めてしまいうわけにはいかないが、その時はつくづく気の強い子だと思っていた。

両親の食事中、彼は一人サークルの中で遊んでいる。うぎぎの人形を見つけ、耳にリボンをはめようとする。うまくいかない。何回か試みていたがあきらめた。

——この子はまだ性格がはっきりわからないネ——

——あきらめは良い方だと思うけど、ミルクを欲しがる時はかなりしつこいし……と父親。

比較する子どもがいない為、赤ん坊とはこんなものとしごくあ

っさり構えている母親に、

——この位の時期は、母親のかかわり方で性格は作られていくの
だろう——と父親は一人つぶやく。

この一年、無我夢中、短い一年であった。けれど息子にとって
は、大人の何十年にも匹敵する程の大切な一年だったはずであ
る。一日一日が、人間として成長していく訓練の場である。何
をボヤボヤしていたのか、私の様に呑気に構えていると、反省ば
かりということになってしまふ。これからも、今まで以上に母親
とのかかわりを基にして、子どもの人間作りが成されていくのだ
ろう。誰にも責任転嫁のできないものを母親は負わされているの
である。

息子は天才

一年前、おっぱいに吸いつくのもやっと。度々大声を出して泣
いていただけ。冗談に、犬の方がまだましネ、と言ったものだ
が、もう、大人の言うことが少々理解できるようになってきた。
気持が通じ合うようになってきた。芸も少々できる。食事の時間
がくると、おばあちゃんの部屋の前まで呼びにいき、そのあと、
自分の食事の椅子に、チョコンと座って待っている。こんなこと
を笑われるかもしれないが親にとっては驚きであり、喜びなのだ。

である。何か一つでも出来る時、天才になってしまう。私の息子
に限らない。幼稚園の子ども一人が、その天才の集まりだったの
である。この年齢では、これができるのが当たり前ではなく、
皆それぞれこんなことまでできるようになってきた子ども達なの
である。

幼児教育にのぞむこと

息子はまだ周囲との関係はうすい。自分の好きなことを、好き
な時にしている、これから色々の体験を繰り返していくうちに、
他との関係もわかってくるのだろう。今までは、かよわき息子に
対して母親は全神経を彼に投じていた。少しでも快適なように
と。息子の方がこちらに合わせてくれないのだから当然のことな
のである。まるで王子様と召し使いのごとく。しかしそうばかり
はしては行れない。少しずつこちらの意志も入れていこうとする
時、彼の様子、状態を十分に知り(知ろうと努力し)その上で無理
のない方法をとっていく。少しずつ少しずつそうしないと、みご
とに失敗となる。幼児の場合と違い、その現象はすぐに現れる。
幼稚園に於て、私の方からその幼児の中に飛び込み、じっくり
理解してあげられたらどうか。幼稚園という集団としてのパター
ンがすべて出来上り、教師は何の不都合さも、疑問も感じない。

その中に無であった子どもが飛びこんでくる。とたんにドカッと教師の色ががぶざぶってくる。どんなに戸惑うことだろう。幼児が幼稚園に通うころになれば、幼児の方から他に合わせるようにしようとする力ができてくるのだろうか、一步教師が後へ引いて、子どもを受けとめてみる、そこから次の段階が生れてくるように思う。

幼児をしっかり受け止めてみるにより、大人である教師の趣味を押しつけることなく、ほんとうの子どもが引き出せるのではないだろうか、私自身、最後まで新米の教師のはずであったが、最初に出合った時の畏れが、失われていたことに気づく。畏れを謙虚に受け止めることは、保育に大切な新鮮さとなるのである。純真に子どもとぶつかり合う姿は美しい。そして、子どもと気持が通じた時の喜びは大きい。教師が自分に合わせようとしていては、この喜びは生じないのではないだろうか。

「自分の子どもが生れたら、幼稚園にはやらずに近所の子ども達を集めて一日遊びましょうか」

そんな会話が我々夫婦の間で出たことがある。幼児期に、作られた集団ではなく、自然に集まった近い年代の子どもの遊びがほしかったからである。何かそこには真の付き合いがあり、それこそ、人間教育の場であると思うからである。そこには小さな社会がある。これはもちろん今でも望んでいることであるが、又別

の立場から幼稚園をみるようになつてきた。

親は忙しすぎる。もっと余裕を持って子どもに接したいと思う。だが四六時中一緒に生活の中で違った雰囲気、気分を持つという事は、むしろ難しい。前項で、母親は常に子どもの側へおいて接すると書いたが、逆に常に一緒にいるが為に、ほんとうの子どもの気持、心を理解し得ない場合も往々にしてあるように思う。

昨晚こんなことがあった。夜、いつもの時間になつても寝つこうとしない。母親はあせり、あの手この手で寝かしつけようとする。が、かえってそれをいやがり逃げ出し、遊んでしまう。そこへ父親が登場する。何やら二人で遊んでいる。まだ言葉にならない言葉だが二人のやりとりはおもしろい。三十分もしただろうか、一人フトンの上に横になり寝入ってしまった。こんな時、私と息子とのやりとりを冷やかに見ていた父親に脱帽である。もちろんこんなに母親が子どもに夢になる時期が続くとは考えられないし、父親のように客観的に見、判断してくれる場として、幼稚園は必要なのだと思うことがある。又母親が子どもと離れる場になるといふこと、常にベッタリではなく、精神的にも、空間的にも、距離をおくことで重要なのである。その状態を自ら努力しなければならぬのであろうが、実際母親となつてみてこれが

意外にむずかしいことに気がついた。家庭に於ては、父親の役割は大である。同じ様な関係で、幼稚園が大切になってくる。母親から離れる場、監視されない場、一人立ちしていく一段階として、どんなに自由な場であろう。そしてそんな幼稚園がほしい。

どんな子どもに育てよう

息子誕生の時、又時折りに息子の将来について話し合う機会を夫婦で持つ。今まで以上に、マスコミにより伝わる教育問題に敏感になる。新聞で学校教育についての問題が提議されると、今までは一般論として受けとめていたものが、もっと身近なものとして、本音で考えられるようになる。そして知らず知らずのうち、その中に引き込まれていく私を知る。何しろ、大学入試の共通一次試験と息子とがもう結びついてしまう始末なのだから、教育制度というものは、人間を教育していく手段であろう。現在の学校教育、特に入試制度は確かに問題があると思う。自分の子どもはそれ等に巻き込まれることなく、伸々とさせてあげたい、と思う反面、学校教育の中に入れば、否応なくぶつかることとなるであろう、母親としては、それから守ってあげたいと思う気持ちと、それにうち勝つ強い人間に育ってほしいという気持とになる。ひとしきり「塾」が話題にのぼったことがあったが、息子の

ことを考えると、まったく周囲を無視できるだろうか、それ程強い信念を維持できるだろうかと不安になる。現在もその様な気持ちで通わせている親がいるのではないか、以前は、その様な親の考えを客観的に否定できたのだが、今はその気持が分かるような気がするのである。いわゆる「お稽古ごと」もその中に含まれる。親が無能であることを横に置き、ひよっとすると、音楽の才能があるのではないか、ちょっと他の子どもより器用な気がする。又反対に自分はこれあまり得意でない。きつと小さい時からやればせめて人並になるのではないか。又、何の考えもなく、あの子がしているからうちの子もという様な具合である。母親の子どもにかける期待は大きい。子どもとは、そんな期待と夢を持たせ、生きがいを作ってくれる物体でもあるのである。

しかし、その夢もちょっと置いておく。時折りの夫婦の会話も、その修正の場になるのである。教育制度による学校、幼稚園は、器なのである。その中にどんな人間がいるかが大切なのだ、主体はあくまで人間なのだと思う。故に、もちろんしっかりした個々の人間を尊重した器を期待すると同時に、そういうものに左右されない、全人間的な教育を考えていくことにしよう。具体的には、まだわからない、否、もう無意識のうちに出発しているのかもしれない。抽象的な、当り前のことであるが、健康な精神と体

をつくるのが息子の目標である。そしてそれぞれ成長の過程に於て、息子自身が正しく判断してくれることを望むのである。

躰の時期

一日を少しでも上機嫌にすぐさせることに全精力をつぎ込んでいる——少々空廻りしている所もあることは認める——母親に、父親が口を出す。

——そんなに甘やかしていると、後が大変だぞ——と。

無事一日が過ぎてくれることで精一杯なのに何と無責任など、一瞬思うのであるが、フト、我に返ってみると、確かなのである。一日中息子と一緒にいるとその成長がわからない。いつまでも誕生時のあの姿なのである。従ってどうしても必要以上に手が出てしまう。

息子は二週間程前まで哺乳瓶を一人で持って飲めなかった。いつも母親が手をかしていたのである。それを見て父親が——もう一人で飲ませなさい——と言う。やはり上手にのめない。瓶を上に向けてることがわからない。又、手をかしてあげる。しかし二、三日もすると、もう一人前、サッサと自分から手を出し持つてむようになった。全部のみ終ると自分でキャップをして、机の上におき、ニコッと笑うのである。夕食は、おばあちゃんと息子は

先にすませる。故に、我々が食事のとき彼は待っていないとはならない。始めは、かわいそうでならなかったが、今ではそれが習慣になり、大人の食事中は、静かに見ているか遊んでいる様になった。夕食時以外でも、大人の食事のじゃまをすることはない。息子に限らないことだと思いが、これ等のことから、それを躰の方向へ持つていくことが可能なのではないだろうか。失敗してはやり直し、という繰り返しになると思うが……、かわいい子どもの動きを躰の穴からちよつと見てみると、又違った見方になるものである。

三歳あるいは四歳で入園して行く子どもは、それぞれに親から躰られてやってくる。それは個性と共に子どもを形作っているものだが、もう少し基本的な躰がなされていたらと思うこともしばしばあった。息子のこの段階で、もちろん偉そうなことは言えないのだが、幼稚園以前に躰は終っているのではないかと思う。現在の息子の行動半径は広くないし、動きも限られている、これから経験を深めることにより人間として生きていく大切な躰や、約束ごとを学び、又大人は教えていかなければならないであろう。今の私は息子の生き生きした姿をみて喜び楽しみ、かわいいかわいいで少々、おもちゃにしているきらいがあるかもしれない。母親として反省しよう。

個と集団

集団教育の開始時期だが、確かにある程度の年齢になると友達を欲するようになる。現在の息子でも「おともだち」「おにいちゃんおねえちゃん」は好きである。どんなに良い環境を設定してあげても一人では生きられないし、大勢の中の一人であることを知ることも大切であろう。息子ももっと強く友達を欲する時、集団は必要であろうが、ほんとうに今までの様な教育まで必要なのだろうか、私が心配するのは、それまでに個としての人格が確立しているかということである。集団には集団のルールがある。それを守ることは大切だ。そして、他との触れ合いの中から、一人では得られない人間として大切なものが生れよう。それと同時に、それ以上に、その子どもの持つ、その子どもにしかないものの、を大切にしたのである。

息子は今かぜをひいている。母乳をのんでいた九か月ごろまでは良かったが、その後どうもはつきりしない。丈夫な両親にとつて、こんな息子がはがゆくて仕方がない。しかし早く良くなるようにと、又少し良くなると、再びかぜをひかぬようにと、厚着をさせ、過保護になる。という訳で、ダメな母親は、今は只、早く息子のかぜが良くなることを願うのみ、実は、幼稚園はまだ遠く

の方にある。

しかしこれを書いていくうちに、幼稚園を色々問題はあると思うが、大きくとらえようとしていることに気づいた。家庭と、幼稚園との役割りの違いがおのずからあり、母親の立場では解決されないことがある。それと同時に、幼稚園に対する期待も大きくなる。母親のできないことを全部可能にしてくれる所という錯覚におちいりやすい。幼稚園に入れることにより、親の役割を放棄し兼ねない。自由になった気持が子どもにもプラスになったらと思う。

息子は最初に、母親との出会いをした。家族、近所の人々、と出合いは増えた。次の大きな出合いは、幼稚園であろう。その大きな出合いが、息子にとって、又すべての子ども達にとってすばらしいものであることを期待したい。

